

総合討論

雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	137
ページ	119-130
発行年	2016-09-20
URL	http://doi.org/10.15021/00006110

総合討論

伊藤：

これから約30分を総合討論の時間に充てたいと思います。これまでのご発表を聞いた上で、民博が次につなげていくために学ぶべき内容、もしくはもっと洗練していくべき点などがあれば、是非ご質問下さい。また、事実関係の確認のための質問でも構いません。どなたからでもご質問を受け付けます。

それから、本日は関連プロジェクトとして2つの機関研究と1つの共同研究のメンバーの方々にも参加して頂いています。そうしたメンバーの方々には学問分野が文化人類学ではなかったり、研究対象としている時代や地域も異なります。そうした見解からのコメントなどもうかがえれば幸いです。それでは、岸上先生どうぞ。

岸上：

北アリゾナ博物館とズニ博物館では協働的なプロジェクトが行われていますけれども、北アリゾナ博物館から見た場合、もし問題点があればどういった点なのか教えて下さい。逆にズニ博物館から北アリゾナ博物館との協働関係において、何か問題があればどういった点なのかも教えて下さい。また、もしそのような問題があるならば、それを乗り越えるにはどういうことをしなくてはいけないのかを、両館長にお伺いします。

ロバート：

思いますに、唯一、問題というか課題として私たちが抱えているのは、そのプロジェクトについて十分にやり尽くしていないということです。私たち北アリゾナ博物館はズニ博物館と2008年から2007年からすでに協働的なことを実施してきました。例えば北アリゾナ博物館で開催しているズニ展（Zuni Festival）という名前のアートショーの催事です。もっと時間をかけて色々行いたいと思っています。時間がもっとあれば、新しいアイデアをお互いに色々出し合って議論できるわけです。いつも時間が足りなくて実施ギリギリになって全てをまとめ上げてしまうわけです。それでも上手くいきますし、そしてそこから学ぶことも多いです。少しの時間で良いのでもっと協働で事業をしたいのです。今述べたズニ展についてももう少し詳しくお話します。ズニ展は単にアート作品を並べて販売する場ではなく、文化のコミュニケーションの場であり、記録を正すためのきっかけとなる事業でもあります。その点においてとても意義のある協働を実現しています。北アリゾナ博物館としては、ズニの人びとが私たちの博物館を見る場合、自分たちのホ

ームであると思って欲しいのです。ズニの人びとが自分たちに関する声明を発信する基地として、フラッグスタッフの北アリゾナ博物館を見なして頂きたいと思っています。ある程度はすでに実現されているかも知れませんが、もっと良くしていきたいと思っています。

ジム：

両館の協働についての課題があるかというご質問でしたが、特に悲劇的なことはありませんし、また敵対しているわけでもありません。両館は、非常に多くの点で同意していますので、意見の不一致が存在するわけではありません。幸いブルーニグ館長と私は同業種における単なる同僚というだけではなく、友達であり、お互いをパートナーとして捉えています。初対面の時からパートナーとして相互にビジョンを持って仕事をしています。これは重要な点だと思っています。

どのような課題があるか、ご質問を受けてから色々と考えています。もちろん課題とすべきことは存在します。すぐに思い付くものとしては、同じく博物館を名乗っている機関ですが、両館では実行能力が異なります。相手が持っているシステムを理解する必要があります。先ほども申し上げましたが、例えば所蔵資料情報のデータベースのシステムが異なります。そのため両館でデータベースのシステムが異なることに派生する問題を解決するために「アミドラネ」というシステムを開発し、今、協力をしています。

特に強調したいのは、私たちが持続性を持っていくためにはまず、システムを作ることです。理論的にはこのアイデアが素晴らしいということで意見を一致させることはできますが、それを持続・実現するためには実行能力が必要です。また、システムが例えばズニ側で故障したとき、ズニ博物館のスタッフに自ら修理する能力があるかどうか。現状であればその能力は低いので、プログラマーを呼んできてプログラムを変更してもらうとか書き換えてもらうしか方法がありません。したがってそれぞれの博物館におけるデータベース運用に関する技術スタッフの能力レベルも大変重要です。

協働カタログ製作計画においては、資金の工面も重要な問題となります。

というのもそのためには博物館での資料の熟覧が前提となりますが、熟覧者をズニから派遣することは容易ではありません。熟覧者は農家かもしれませんし、アーティストかも知れません。宗教指導者の場合もあります。数字だけを頼りにすればズニの失業率は高いので、みな時間があると思っているかも知れません。しかし実際はズニの人びとは毎日をとて忙しく過ごしているのです。畑仕事で忙しかったり、作品制作で忙しかったり、宗教儀礼があって忙しかったり、家屋の建設だったり車の修理だったり、毎日忙しいのです。この場合、ソースコミュニティの専門家を招聘して博物館資料を熟覧してもらってコメントを残してもらうこと自体も課題の一つとなります。「私たちの博物館にお越し下さい。是非コメントしていただきたい」と言われても、忙しくて地元を離れ

ることが難しい人もいるわけです。「旅費や謝金は用意してもらえるのでしょうか、手弁当（熟覧者負担）なのでしょうか」「収蔵庫にはカルチュラル・センシティブティが収蔵されているのでしょうか」「熟覧対象にそうしたセンシティブなものが含まれているのかどうか」、そういったことも事前に聞いておかなければなりません。

そうした課題に対する一つの解決策は、例えば博物館間の横断検索システムに収蔵博物館側の義務としてあらかじめ組み込むことが考えられます。これはあくまでも今思いついたアイデアを思いついたままに口にしてはいるだけですが、例えば民博のフォーラム型情報ミュージアムや、私たちの「アミドラネ」の連携博物館が、システムへの参加料を払うのです。そして博物館の研究者や学芸員がソースコミュニティに何らかの情報を求める場合は、少額の謝金をその都度払ってコメントを求めるのです。

情報を求める度に、例えば一回ごとに謝金を払うとか、または年間の契約金を設定するとか。いずれにせよ、長期的な運用を考えれば予算の確保は必要となります。ソースコミュニティにおける情報提供者であるエキスパートの関心を維持するための工夫も必要です。このように課題は色々あります。現状に満足しているわけではありません。「釈迦に説法」という言葉もありますけれども、あらゆる角度から物事を見ていくことが必要です。物事を多角的に捉える姿勢が必要です。裏側からも考えるようにしましょう。そして課題を明らかにして、理屈だけではなく可能な限り現実的にこのプロジェクトを持続していけるように考えていくことが大切です。

ロバート：

データベースの問題についてちょっとコメントさせていただきます。多くの博物館が、20年から25年前に「オーガス」というデータベースのソフトウェアを導入しました。これは所蔵資料の情報管理のソフトです。私自身は「オーガス」のシステムについて詳しく知っているわけではありません。しかしこのソフトはほとんど使い物にならないくらい不完全なものなのです。全くもってユーザーフレンドリーではありません。

ズニ博物館の「アミドラネ」のプロジェクトに際し、連携博物館の多くが「オーガス」を導入していることが分かりましたが、そこから資料情報をズニに移行するのがとても大変で一筋縄に行かなかったのです。

ジムさんもお話しになっていましたが、北アリゾナ博物館の職員は学芸員や資料管理の専門家であってプログラマーではないのです。それが大きな問題でした。民博がフォーラム型情報ミュージアムのプロジェクトを進められるにあたって、使い勝手の良く、アクセスのしやすいデータベースを構築することが非常に大事だと思います。

岸上：

ジム・イノーテ館長に質問です。ケンブリッジとかその他の外国の機関とも協定を結

んでこのプロジェクトをされていますが、プロジェクトを持続していく上で何か特別な努力はされていますか。

ジム：

はい。特に私たちズニの側で考えていくべきこと、努力しなければいけないことがあります。一つは、私は自分が生まれた村に今でも住んでいます。ここにいるシオウテワさんも同じです。ズニの多くの人はずっと同じ村に住んでいるのです。新しいプロジェクトを構想する場合、その内容が私たちズニにとって文化的・社会的なインパクトが考えられるものであれば、そのことについて非常に慎重に検討していかなければなりません。

例えば今回の「アミドラネ」のプロジェクトでは、地元の宗教指導者やアーティストとの信頼関係が前提となるのですが、私たちズニ博物館側が誤って歩を進めてしまったら、私は生涯その誤りを背負って彼らと同じ村で生きていかなければならないのです。もしも私がズニのコミュニティを訪れるよそ者だったとしたら、そのようなミスを犯しても、「さよなら」といって帰ることができます。しかし私たちは自分たちの生まれ育った町でこれからもずっと生活していきますから、地元での関係構築には非常に注意を払っています。何かあれば生涯つきまとうからです。プロジェクトの持続可能性を考えるにあたっては、自分たちが背負い込む可能性があるリスクについても非常に注意深く検討する必要があります。プロジェクトにおける個人が抱えるリスクについてです。また、コミュニティのレベルでもリスクを検討すべきです。私たちは地元社会において自分たちの位置づけ、身分というのがすでにできあがっているわけですから、今述べたような内容については大事にしたいと思っています。

もうひとつは、連携博物館との間で明瞭明確な役割分担を持つことです。いったん合意したものを何度か振り返ることも重要です。定期的に、例えば一年に一度会合を持ち、プロジェクトに関する合意について相互理解の程度を再確認したり、変更すべき点があればそれを変更したりすべきです。また、職員に異動があれば、新人スタッフにこれまでの合意事項などを教える必要があります。例えば資料管理部門に人事異動があった場合です。プロジェクトに関する明確さ、あるいは一貫性を維持することが大切です。

伊藤：

先ほどのブルーニグ館長の話題に関して追加で説明いたします。ブルーニグ館長は先ほど「オーガス」という言葉を使用して資料管理データベースの問題点をお話頂きました。「オーガス」というのはデータベースのソフトのことです。ちなみに民博は確か「ジュピター」というカスタムしたシステムを使用しています。佐々木史郎先生か飯田卓先生、そのことについてご存じでしょうか。民博は「オーガス」ではなかったと思います。

ジム：

もう一度お願いします。「ジュピター」ですか。カスタマイズされたシステムを使用している博物館もたくさんあります。そういうことなのです。繰り返しになりますが、多くの異なるシステムが存在しているのです。それではどのようにして異なるデータベース・システムを用いている博物館間の資料情報を統合するのか、というのが問題になります。

伊藤：

他にご質問、聞いておきたいこと、確認したいことがある方はいらっしゃいますか。飯田先生、お願いします。

飯田：

民博の研究部の飯田と申します。今日はたくさんのお話ありがとうございました。おそらく、ジム・イノーテ館長への質問になると思います。私の理解する限り、民博が進めていこうとしているフォーラム型情報ミュージアムのプロジェクトと、ズニ博物館の「アミドラネ」プロジェクトでは差異があって、その差異が非常に大きいと思っております。ズニ博物館のプロジェクトの場合は、ズニ博物館が世界各地の博物館とソースコミュニティとの仲立ちをする、関係を取り持つ役割を果たしていると思うのです。一方で、民博のフォーラム型情報ミュージアムの場合は、すでに収集して所蔵しているさまざまな資料について、ソースコミュニティとの間で情報共有していくのですが、私たちはまず情報共有すべき相手を見つけなければなりません。

すでにいくつかの事例ではソースコミュニティを見つけられています。あるいは適当な博物館が連携機関になっている場合もあります。しかし、情報共有すべきソースコミュニティの候補が複数ある場合、どのように調整すればよいのでしょうか。私たち民博ではそのことがおそらく問題になってくるかと思えます。この点に関してズニ博物館はプロジェクトを進めてきた中で、何か民博にとって参考になるようなご経験とかご意見をお持ちでしょうか。もし何かあれば少し教えていただきたいと思います。

ジム：

はい。おっしゃる通りだと思います。私たちのものと民博のプロジェクトは異なります。まず、明らかに対象設定が異なります。民博の方が規模が大きいです。私たちは一つのコミュニティ、一つのソースコミュニティがプロジェクトに関与しています。さらにいうと、ソースコミュニティが中心に位置していて、中心から世界の博物館に向かった働きかけです。

私たち「アミドラネ」のプロジェクトではたくさんの方と連携しています。どうい

った機関と仕事をしていくかということ、パートナーの選び方についてまさに最近気がついたことがあります。これもまた実行能力と関係してきます。

例えばニューヨークにあるアメリカ自然史博物館 (American Museum of Natural History) は、非常に巨大な博物館です。ケンブリッジ大学附属考古学・人類学博物館 (University of Cambridge, Museum of Archaeology and Anthropology) とも連携しています。どちらも非常に高名な博物館です。それ以外にもメジャーな博物館と連携しています。しかしながら私たちの誰もが十分なキャパシティを持っていると思い込んでいたそうした博物館でさえ、十分な実行能力を備えていなかったのです。連携機関を選ぶ場合は、プロジェクトに関して実行能力を備えた機関を見つけ、そういう機関と連携すべきだと思います。

いまこのようにお話しする中で思いついたことがあります。キャパシティというか実行能力というのも選定基準の一つになると思いますが、その他にも相手がどれぐらい敏捷に対応してくれるかということも重要です。本当にその機関が機敏に反応してくれるのか、そして変化に対応してくれるのかということです。大規模な博物館というのは、やはり官僚的な傾向があります。このことも根源的な問題だと思います。変化を起こすスピードが遅いし、反応も遅いわけです。一方で小・中規模の博物館や研究機関は、より敏捷に動き、そしてまた反応も早いわけです。

リーダーシップというものも明らかに重要な点になります。プロジェクトにきちんとしたリーダーシップが発揮されているかどうか。機関の長がリーダーシップを執っているかどうか、それとも現場のスタッフが上役に話を売り込まなければならぬのかどうか、つまりトップダウンかボトムアップかということです。機関の執行役がそれはいいアイデアだと思って実行に移せば、よりうまくプロジェクトとして前進するはずですよ。

ロバート：

いつもその通りに行くわけではありません。

ジム：

いつもではありませんね。

実行能力、技術に関する知見とスキル、敏捷さ、そしてどれぐらい官僚主義的ではないかどうか、といった点が連携機関選別の基準になると思います。また、連携機関やソースコミュニティが別のグループとすでに連携しているかどうかも重要です。例えばズニの場合では文化資料の諮問委員会というものが既に発足しています。つまり、その連携機関や組織に、そのような役割を果たせるような部門があるかないか、担当者がいるかないかということが重要になります。重要なのはソースコミュニティにおけるエキスパートが誰なのかを決める主体が誰かということなのです。博物館が決めるのでしょうか。それともソースコミュニティの政府や村落政府なのでしょうか。もしくはアーテ

イストが決めるのか、農業従事者が決めるのか、宗教指導者が決めるのか、ということなのです。熟覧者を決めるのは一体誰なのでしょう。こういったことも非常に重要な争点になってくるかと思います。

伊藤：

ズニ博物館の場合は、いろいろな意思決定がわりとやりやすかったのでしょうか。

ジム：

そうですね、スタッフの数は少ないです。年度予算もおそらく10万米ドル（約1,200万円）を下回るでしょう。なにかいいアイデアが浮かんだら、館長である私が意思決定をいたします。そういう意味で敏捷に動けますし、規模が小さく、そして協働しやすい相手だと思います。しかしながら、先ほども申し上げたように、私たちが負うリスクに関しては非常に慎重に検討します。

伊藤：

ありがとうございます。

ロバート：

ジムさんが今、リーダーシップが重要だというお話をしました。機関の長がどのようにプロジェクトのことを考えているのかと。リーダーが後ろにいるのか前に立っているのかと。しかしながら機関の長たる者は、常に気にかけていなければならない点があります。それは組織の下で働くスタッフが、常にたくさんのプロジェクトや諸活動に関与していることです。機関の長が「これから新しいプロジェクトを始めます。これからあなたは協働カタログ制作に関してズニの人びとと働いてもらいます」というふうに言うのですが、スタッフから確実に「分かりました。ボスの言うことですから」という返事が返ってくるわけではありません。話がスムーズに進まないということもあります。彼らも多くの業務を抱えていますから。このプロジェクトに関して言うと、ITを専門とするスタッフが必要なわけです。しかしその担当者がこのプロジェクトにしっかりと参画しておらず、すでにプロジェクトから離れてしまいました。

そういう意味で機関の長や執行役が「今からこれをやります」と言うのは簡単なのですが、本当にスタッフは受け入れてくれるのでしょうか。いかにその事業が重要なのかをスタッフに理解してもらうことも大切です。

伊藤：

他にどなたかいらっしゃいますか。だんだん暗くなってきましたね。明るい将来に向

かうようなご質問などありませんか。はい、小川さやかさん。

小川：

立命館大学の小川さやかと申します。本日は大変興味深いご発表ありがとうございました。質問が二点ございます。一点目は先ほどの飯田先生のご質問と重なります。

ソースコミュニティについてです。ソースコミュニティとは誰のことを指すのでしょうか。具体的に質問します。A民族が作ったものがB民族に渡って、B民族ではA民族と全く異なった意味あいでのものが使用されているとします。資料としてそのものをB民族から収集した場合、ソースコミュニティは制作をしたA民族になるのでしょうか。それとも使用者であるB民族になるのでしょうか。もう一度言います。もし複数の民族集団の間で同じものが異なった意味で使用されている場合、ソースコミュニティの選定についてどのように調整していくのでしょうか。それが一点目のご質問です。

二点目の質問は民族誌の書き方とか民族誌のあり方に関連することです。私は異動に伴い職場が博物館ではなくなりましたが、今日のご発表を聞いていて本当に感銘を受けました。ズニ博物館や北アリゾナ博物館が行っているプロジェクト自体が、民族誌の書き方とかあり方にとって非常に示唆的なのではないかと思います。

民族誌をめぐる情勢として、制作・執筆過程をオープンにしていこうとするオープンアンソロポジーといった運動だとか、民族誌を調査対象者の人たちに自己制作させる運動ですとか、文化人類学におけるさまざまな実験的な試みがあるのですが、今回お話し頂いた博物館の協働カタログ制作プロジェクトも、おそらくそうした活動に大きな影響を与えるのではないかと思うのです。このことについてご意見をいただければと思います。以上です。

ジム：

まず、複数のコミュニティが絡んでいた場合にはどうするかという話がありましたが、私たちズニの場合は一つのコミュニティしか関与していません。シンプルなお答えになってしまいますが、私たちの場合ではそういったことはありませんでした。アリゾナ州のホピの場合は状況が異なり、12の異なる村落に人びとが暮らしています。しかし私たちズニの村は一つだけなのです。ですので、私たちの場合はあまり例外がなく、うまく機能しています。

しかし、先ほどサイロを例に説明したように、私たちズニの場合は知識の継承システムが複数に分断されています。あるグループがある知識を独占的に保有していて、時にはそのグループがあるものを作ったりします。それを作る知識が無い場合は別のグループから貸借することもあります。その結果そのグループが本来なかった知識やものを獲得することもあります。重要なのは、誰にも認められ尊敬されているグループが、アド

バイザーとしてそのソースコミュニティに存在しているかということです。そのグループからのアドバイスをコミュニティとしての適切なコメントとして提供できるかどうかなのです。

文化というのは流動性のあるものです。変化し続けます。博物館も同様に変化し続けます。直線的ではありえないわけです。

よく例え話に引くのですが、私たちが行っている作業というのは、曲がりくねった道をまっすぐ歩こうとしているようなものです。博物館資料の解説が本来あるべきものとは違っていることが多いので、そのぶれた道を調節しながらぶれずに直進するようなのです。人生と同じです。日常生活にはいろいろなことがあり、常に直進できるわけではありません。曲がりくねった道を調節しながら、正しく進むべき道として歩んでいくのです

この話題については、それほど気分が暗くなるものとは思っていません。というのも、フォーラム型情報ミュージアムのプロジェクトは成功に向けて、すでに私たちが歩んできた経験からたくさんのことを学んでいただきたいと思います。実行能力の問題ですとか、リーダーシップ、予算的な問題です。私たちが経験してきたことはこういったことです。それをみなさんのこれからの経験に活かして頂きたいと思います。私たちの経験や失敗を学ぶことで、みなさんのフォーラム型情報ミュージアムのプロジェクトが今後高い確立で成功していってほしいと思っています。システムの基盤というものは世代を超えて継承されていきます。次のシステムは今のシステムよりもよくなるはずで、世代が進むごとに良くなっていくわけです。

ロバート：

複数の民族集団が関与する場合、一体誰をソースコミュニティと呼ぶべきなのかというご質問に対してコメントをしたいと思います。民族集団Aが作ったものを、民族集団Bが受け入れて違う意味を与えるということは、非常に面白い状況設定だと思います。ただし実際にその質問に答えるためには、もうちょっと状況を整理して理解を深めなければなりません。そもそも民族集団Aはどういった意図でそのものを作っているのか。そして民族集団Bはどうしてそれを獲得し、新しい解釈を与えてまで使用方法を変えたのか。これら二つを整理して考えていくことがまず重要だと思います。

というのも、これは、博物館に所蔵されている資料の動きを理解するということと同じだからです。複数のグループを経て、それらでどのような文脈に則って使用されてきたのかを理解していくわけです。それらを理解して全体を理解することができれば、その資料についての全容を把握することになります。

ジム：

人間の経験そのものにも応用して考えられると思います。

小川：

ありがとうございます。

ロバート：

今のコメントを聞いた感想を教えてください。

小川：

ものの履歴そのものに関わる民族集団間の関係性を視野に入れていくことは、非常に重要だと思います。コメントありがとうございます。

伊藤：

そろそろ時間ですが、ジムさんがうまくまとめてくれたのでまたちょっと希望が見えてきたように思います。もうご質問はありませんか。それでは玉山さんで最後とします。

玉山：

ご発表ありがとうございました。ジム・イノーテさんに質問です。ご発表は非常に感銘深いものでした。バーチャル・リパトリエーションというのは、バーチャルではあるけれども返還ではない、と。

そこでその資料の所有に関してなのですけれども、ソースコミュニティの成員としてジムさんご自身はその資料がもともとあった村落に返還されるべきだと思いますか。しかし物質ではなく所有権という権利はそれぞれの資料を所蔵する博物館が保持するわけです。こうした状況についてどのように思われますか。もしくはどのような経験をされましたか。すなわちデジタル画像などを介したバーチャルな返還と、実際の物質的な移動と所有権の委譲を含む返還に関して何かご経験があれば教えてください。

ジム：

まず、博物館あるいは研究機関としては、所蔵している資料について所有権などの何らかの権利を持つと考えるわけです。そして博物館の中にはそれらの資料が、人類全体の営みや経験の一部であって、ある特定の集団や個人だけにアクセスを許容するべきではない、誰もがアクセスできるようにすべきだ、と考える人びともいます。そうした意見が存在するのは分かりますが、ソースコミュニティは全く違う見解も持っています。所有の概念には二つの考え方があるわけです。返還対象となるような資料に対するソー

スコミュニティの見方としては、それが不法な手段を伴ってコミュニティを離れたか、あるいはコミュニティの成員の誰かが関与した、といったものです。博物館資料にもいろいろなものがありますので、合法的・正当な手段を伴って売買取引を経て入手したものももちろんあるはずですが。

しかし人骨ですとか、聖物、埋葬品といったものについては、いまでもソースコミュニティに属している、私たちの所有物であると強く信じられているわけです。そういったものについては返還されるべき対象だと思います。私も強くそう思います。しかし人骨の場合には返還したとしても扱いが困難なこともあります。遺体や遺骨の埋葬儀礼は、通常は一度しかされないためです。二度実施するということは通常考えられていないのです。これが状況を難しくしている原因です。民族集団によっても見解はさまざまです。資料の所有権に関する全体的な風潮というのは今述べたような感じです。

バーチャルな返還、あるいはデジタル返還という言葉は、私は嫌いです。同僚にもこの言葉を使わないよう伝えましたし、ある会議に参加した時は立ち上がって「その言葉を使わないでくれ」と言ったこともあります。「そんな言葉を使って記録しないで欲しい」、「みなさんの頭からそういった考え方は消し去って欲しい」とお願いしました。なぜならその用語が混乱をもたらすからです。そもそも私たちは何かを故郷に帰すこと、元にあった場所に返すことを意味する、「返還 (リパトリエーション)」という言葉の概念を、ズニの人びとに理解させるのに非常に長い時間を費やさなければなりません。なかなか理解してもらえなかったのです。したがって、今になってまたデジタルあるいはバーチャルの返還と言ったところで、ズニの人びとからは「何の話だ」という反応が返ってくるのです。「また新しい概念か」「もっと混乱させるつもりか」というふうに人びとから文句を言われるわけです。「デジタル返還、バーチャル返還。それでものは返ってくるのかどうなのだ」と迫られるわけです。

ある博物館は、「資料はこちらで保管します。電子化した映像データと音声データはお渡しします」と言ってくるのです。それに対して私は、「それは返還ではありません。単なるデジタルコピーの提供です」と応答するわけです。すなわち、デジタル化ということは複製を作るということであって、コピーを私たちに渡そうとしているだけで、それは原物の返還ではない、という議論になるわけです。

例えば鑑管を完全な所有権と共に委譲してくれるのならば、もしくは銀板写真のネガと現像した写真といった物理的なものを所有権込みで渡してくれるのであれば、その時はじめて「返還」という言葉が使えるわけです。しかし、デジタル返還やバーチャル返還というのは、実際の返還とは全く異なります。デジタル返還やバーチャル返還という言葉の使用法について問題提起をして変えさせようとしています。「デジタル」や「バーチャル」といった言葉と「返還」という言葉をくっつけてはならないのです。それが私の意見です。

伊藤：

それでは時間になりましたので、今日のワークショップを閉めたいと思います。民博側にとってはとても良い学びの場になったと思います。

本日のために米国からお越し頂いた3名の発表者のみなさま、それから、共催になっていただいた北海道大学アイヌ先住民研究センター、さらに関連プロジェクトとしてご協力頂いた飯田先生、佐々木先生、そしてそれら機関研究のメンバーで本日ご参加頂いた皆さま、どうもありがとうございます。本日はどうもありがとうございました。